



# 新たな名産への願いを 真つ赤なイチゴに託して

ネクサスファーム  
おおくま  
さとう しげき  
佐藤 栄記さん

「ネクサスファームおおくま」は、大熊町大川原地区が2019年に避難解除されたのに先駆け、前年7月に設立されました。2・9ヘクタールの広大なビニールハウスの中で、最新鋭の環境制御システムのもと、通年でのイチゴの栽培・出荷が始まっています。「イチゴは手がかかりますが、思い通りにはいかないからこそ、やりがいを感じますね」

そう語るのは生産部の佐藤栄記さん。6年前に福島に移り住み、マスコミ関係の仕事を経て、「ネクサスファームおおくま」の社員となりました。

佐藤さんをはじめ従業員のほとんどが農業未経験者ですが、宮城県のイチゴ生産者から指導を受け、一致団結して栽培に取り組んでいます。機械化によって労働負荷を軽減し、誰もが働ける会

※JGAP:農産物の安全を確保し、より良い農業生産を実現するための日本独自の認証制度

県立福島明成高校

JGAPを取得したりんごを生徒さんと一緒に収穫しました。

全国最多のJGAPを取得した農業高校を訪問してきました。

※JGAPの取組を進める県立福島明成高校を訪問しました。

生徒さんから「ふくしまの農産物のおいしさを全国に伝えたい」「現状に満足せず、高いレベルを目指したい」というお話を伺い、ひたむきに努力を続ける姿勢に感動しました。

これからも子どもたちが、自分の夢の実現に向かって、誇りと自信を持って学んでいけるよう、充実した教育環境の整備に取り組んでいきます。

vol.13

## 知事 だより

知事の活動を伝えるコーナー!



▲ 厳しい基準をクリアするための選果作業。「傷ものは出荷できないため、収穫時は特に気を配ります」

「とちおとめ」「ふくはるか」など  
6品種が栽培されています



▲ 養液を自動で灌水するシステムと、太陽光を利用したハウスでイチゴを周年栽培。



▲ スタッフは20代、30代が多く、和気あいあいとした雰囲気。地元出身者のほか移住者も。

社を目指しています。

「失敗を繰り返しながら、身をもってノウハウを学んでいます。イチゴは出荷基準も厳しいので、みんなで試行錯誤しながらいいものを作ろうと心がけています」

昨年12月には、大熊町内のコンビニエンスストアで一般販売を開始しました。初日には棚に陳列する前から並んだお客さんもいて、大好評のうちに完売したそう。「楽しみに待ってくれていたことがうれしかったです」と佐藤さん。

今後は県内スーパーでの流通も検討しているほか、株数も現在の38,000株からおよそ3倍に増やし、一層栽培に励みたいと、力が込めます。

「大熊町の新たな産業として期待に込めたい思いでいっぱいです。いつか『イチゴといえば大熊町』と言われるような名産品になつたらいいですね」

【問い合わせ先】  
株式会社ネクサスファームおおくま  
双葉郡大熊町大字大川原字西平2127  
02440(23)7671

国外や県外出身の人から見た福島を知るコーナー。  
第14回は、喜多方市で養豚を学んでいる長谷川さんです。

### 会津の自然と田園風景が大好きです！

父が喜多方市出身なので、福島とは縁がありました。現在は養豚農家のご夫婦と一緒に、毎日約400頭のお世話をしています。鹿児島県の農業大学校で養豚を学んでから来たので、最初のころは気候の違いに驚きました。

会津の景色が好きで、特に田んぼは四季がはっきりと感じられるのでお気に入りです。12月で研修期間が終わったので、これから正式に養豚農家として頑張ります！



愛情を持って育てている子豚と一緒に

外から見た福島のイトコロ教えます

ふくしま

二重マル

会津の食べ物もおいしくて！

長谷川優奈さん (東京都出身)